

末 黒 野

すぐろの

11月号

(通巻915号)

小川五泉元主宰
追悼号



夕河鹿

森清堯

どくだみや日矢に眩しき白十字
堂前に尺を揃へりねぢれ花
白南風や満席となる渡し船
吊橋の影を濃くして夕河鹿
初蟬ややうやくとどく良き知らせ
雨蛙跳んで大葉のど真ん中
束の間の湖の晴虹の橋
暁闇の窓打つ音や戻り梅雨
笛腰に浴衣の男さつさうと
碑の背の木槿の白さかな
唐黍やうれしさの粒ぽろぽろと
ひぐらしや池へと伸ぶる山の影

蛭狩

岡野里子

連獅子の毛振りめく樹々青嵐
風鈴の百の音子安地藏尊
餌を欲りて寄る神鹿や袋角
手に触れて生あたたかし袋角
点滅を包む小さき掌蛭狩
戻り梅雨ざんざ降りなる句座帰り
日盛の露地極楽の余り風
花合歓や湯宿の縁の女下駄
松蟬や汀にしみる波の泡
また行けり炎暑切り裂く救急車
結界や石に鎮座の夏蛙
のうぜんや篠つく雨の権太坂

流離の雲

黒滝志麻子

(顧問)

彫り竜の深き木目や影涼し
 ころころと少女の笑ふ夏旺ん
 十一や牧の昼餉はにぎりめし
 奥宮の千年杉や青葉木菟
 休みゐる木椅子に降りぬ蟬時雨
 一舟に百の光彩穴子釣
 秋立つや流離の雲を遊ばせて
 白萩や来ぬ明け方の通り雨

甲矢集

炎天下

石黒興平

瀬も淵も釣師の影や鮎の川
 綾なせる日裏日面青葉山
 紫陽花の果てても散らぬ勁さかな
 茅舎忌やつい撫でてみる接種跡
 すべきこと有るが幸せ雲の峰
 突堤の涼しさに立ちほつれ髪
 遊び舟降りて足元定まらず
 逃げ込むはいつもの茶房炎天下
 せめぎ合ひ蓮の下の水の音
 秋さびし墓得て遠くなる故郷

夏柳

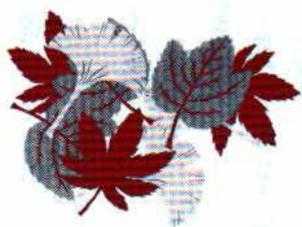
菅野日出子

初蟬や二声三声それつきり
 林泉や真鯉ひそめる蓮浮葉
 渦なして坂かけ下る夏落葉
 山門に風の道あり夏柳
 一鉢の鈴蘭鬱を払ひけり
 ぬきん出て風にあらがふ竹煮草
 十葉の根を引く力失せにけり
 病む友へ残暑見舞や共に老い
 いつとなく溢るる書棚藤村忌
 おぼえなき朝顔二輪厨窓

茄子の花

森清信子

明けきらぬ空を揺さぶり時鳥
湿原の水面の震へ糸とんぼ
欲張らぬ暮し穏やか茄子の花
涼風や北山杉鬱蒼と
むづむづと力の湧き来雲の峰
一人居の星の潤めり夜の秋
骨と化し寄する流木鱒雲
鬼やんま洗ひたてなる空まぶし
稜線に育つ白雲葡萄棚
竹林の祠新たやちちる虫



乙矢集

配列は音順、月毎の循環



星の話

小田嶋野笛

明急ぐ空待ちきれぬ鳥の声
濯ぎもの洗ひものして暑を過ごし
夫に似る倅の背や夕端居
縁台や子のじやんけんのばあばかり
水を持ちし星の話や夕涼み
夏痩せて組んでは解す一句かな
体温を超ゆる気温や広島忌

百日紅

岡田史女

菖蒲

加藤静江

自墮落に過ぎゆく日々や百日紅
何んといふことの無き日や心天
橋脚に波立ち上る晩夏かな
日矢させる十番館や縞蜥蜴
新涼の山手の丘やカフェテラス
十字架の裾を囲ふや猫じやらし
医通ひのだから坂や花木権

純白の菖蒲ひと本濁り池
万緑の重なる影の深さかな
古民家の土間につややか小玉葱
夏芹や勢ひのままの色の濃き
乾ききる八つ橋白し土用凧
ワクチンの副反応やはたた神
新盆の久遠の空の蒼さかな

立 秋 高木邦雄

水打つや亀甲著き石だたみ
阿夫利嶺や暮色を背負ふ雲の峰
片蔭や児等巧みなる一輪車
立秋の行合の空雲一朶
新涼や湖面に映ゆる朱の鳥居
完熟の西瓜厚切り能登の塩
鯛の飛ぶ河口に映ゆる入り日かな

稲の花 長尾タイ

含羞草小指の先の好奇心
懐郷や指に絡むる蟬の殻
ひとしきり玻璃に奏づる蟬の夜
夏野行く貨物列車の音遙か
一人居や西瓜の種を飛ばす夜
憂き事を引き摺る一日蚯蚓鳴く
稲の花朝なあさなの老の影

ソーダ水 池乗恵美子

どの薔薇も佳き名をもてり風もてり
水馬の踏ん張つてゐる水輪かな
言ひ出せばきりなき愚痴やソーダ水
若人の手足眩しきプールかな
若沖の画集に棲むや紙魚二匹
みんなの空の彼方の故郷かな
合歡の花逢魔が刻の仄明り

今朝の秋 今村千年

行く夏やきのふと違ふ波の音
蟾蜍かはたれどきを待ち兼ねて
パレットにプルシャンブルー夏深む
隠沼の風入れかはる今朝の秋
秋立つや杖一本の旅支度
かはたれにまたもな鳴きそ秋の蟬
いくたびもいちづに舞ふや秋の蝶

鬼 瓦 大川暉美

老鶯の律義全う朝なさな
庚申塔へ松籟至る涼しさよ
夏霧のべールを脱ぐや甲斐の峰
潮の香の駅舎出づるや大西日
旅終へて話の弾む一夜酒
炎天へ目剥く歯を剥く鬼瓦
睡蓮の葉蔭にありぬ池の黙

籠 枕 太田良一

廃村や谷に根を置く虹の橋
打て打ての少年野球大西日
寝ころべば近づく昭和籠枕
石段の手摺に残る残暑かな
朝顔の路地にも音なかりけり
誘はれて手足の動く踊かな
後の世も句座を囲まむ天の川



青炎集 森清堯選



横浜 六崎正善

月涼し松を頂く石の山
照り返す海の眩しき夏野かな
たまに鳴くは沼の主か牛蛙
口染めて飲み干す器氷水
魚跳ねて波間に月の涼み舟
潮しぶき浴ぶる露天湯大南風

横浜 上月智子

彩りの和菓子切子の大き皿
みんみの声の張り付く大樹かな
加賀蒔絵の器食み出す鰻かな
竹林の揉み合ふ葉音星迎へ
平仮名を教はる幼星祭
囃み碎く薄荷ドロップ原爆忌

藤沢 宮澤靖子

象潟の夏の岩牡蠣大振りぞ
夏霧の湧き立つ苔の川瀬かな
孵化場の鮭の慰霊碑晩夏光
川の字に残る雪溪湯殿山
一望の庄内平野青田風
玄関の額掛け替へて秋に入る

横浜 横路尚子

絶妙の間を置き鳴けり牛蛙
石文の彫目きはやか梅雨夕焼
ひと声の蟬や芭蕉の句碑の寂
里山の添景となる青田かな
古墳ある鎮守の杜や蟬時雨
江ノ電の車窓に揺れて花芙蓉

平塚 尾崎千代一

去る鳶の影の速さや青岬
噴水の散らす日差しやロータリー
夏草の息の荒さや日照雨
曝書して書棚の本を並べ替へ
白壁のくすむ運河や晩夏光
乗つ越しの分岐の岩や夏終る

横浜 岡美智子

浄蓮のしぶきを浴びて踊子草
先生は三廻り若し夏期講座
白髪の占むる前列夏期講座
古伊万里に盛る冷奴贅ひとつ
幾歳の穢れのあらず古代蓮
ラジオから昭和のメロディ夏果つる

横浜 渡辺富士子

粉塵を散らす雨足夏薊
膝崩し気も崩したり冷し酒
袖通す赤札の服夏の果
夏草は子らの遊び場かくれんぼ
対岸の揚げ場の筏大花火
へのへの真一文字や青林檎

狭山 沼崎千枝

サングラス卒寿のモガは図書館へ
万緑の是よ馳走よ山の宿
尻太き縄文土偶夏の雲
ぶつ切りのトマトのジビエシチューかな
小さきを愛でて馬鈴薯掘る幼
グライダーの離陸の黙や秋澄めり

横浜 松川昌義

捨て時を迷ふアルバム芥子の花
半夏生皮靴捨ててタイ捨てて
朝涼やジグザク登る九合目
指先のなぞる肋骨夏の果
癖文字の暑中見舞や出雲弁
朝採りの露地の野菜や夏の露

宮城 門間としゑ

迎火や肩中広き父の影
爽やかや代替りたる青つむり
手の甲にメモ二つ三つ盆仕度
敦盛も直実も老ゆ村まつり
星月夜災禍の止まぬ青き星
新盆の兄といただくずんだ餅

耕 土 集

岡野 里子 選

横浜 内山 みち

一枚の翅捧げつつ蟻の列
蜘蛛の跳ぶアベリアの垣系ひきて
彼の人の筆の献辞や土用干し
若き日の書き込み眩し書を曝す
渾身のイルカのジャンプ秋高し

横浜 近藤 知子

戸を繰るや朝風と入る蟬時雨
端居してデネブを探す湯治宿
玉のごと照り鈴なりのミニトマト
雨あがり土用芽垣を赤く染む
平らかなる海やびかりと跳ぬる鯉

横浜 伊藤 鴉

碧天や大雪溪を登る雲
いづこまで伸ばす覇権や藪枯らし
往来の絶ゆる家路や月涼し
ひまはりや反戦成らず反撃す
雷走る煙る土砂降り追走す

横浜 白居 澄子

青空にひとすぢの雲蟬時雨
電線の影をも欲しき酷暑かな
鳥声のことに明るし今朝の秋
盆の月畑に招かれざる獸
終戦日百壺才となる兎貴

横浜 杉山くみ子

緑蔭の腰掛の石ひんやりと
コースターに零るる泡やソーダ水
初蟬や木洩れ日揺るる遊歩道
懐かしき海の音とも貝風鈴
夕涼や琴の奏づる夏の曲

横浜 片岡登志枝

香を四囲に放ちて百合や真夜開き
蝙蝠の激突レーダー無くせしか
茗荷の子染むる酢漬けやほの紅く
二十年義母の形見の蘭咲けり
西瓜食ぶ三浦の産の甘きこと

横須賀 河野 礼子

日の落ちて今日も今日とて生ビール
甲板の灼けて出来さう目玉焼
黄昏や風鈴響く石畳
木下闇一条の日の眩しくて
新涼を一筋の風はこび来る

横浜 北野 節子

テレビ付け世界の旅や梅雨籠り
紫陽花の咲き誇れるやシーボルト
静寂の闇の小流れ蚩湧く
立葵畑の隅を彩りて
同窓の八十路集ふや鱧料理

横浜 小林 拓路

固き壁をむんずと掴み蟬の殻
耳鳴りかいや初蟬に紛れなし
炎天に粥のほひや中華街
亭々と連なる雲や蟬しぐれ
穏やかなる風の日や原爆忌

三浦 田中由紀子

草蔭の空蟬一つ朝日影
夏草を分けつつ入りぬ鎌の音
東雲や日に先駆くる蟬時雨
大夕焼一湾越ゆる旅心
真帆片帆走る波間や雲の峰

文京 大曲ゆき枝

エレベーター一こまごとの雲の峰
ハンカチのくたびれてをり遅延バス
夏負けやとぎれとぎれのアルペジオ
転生の奇しき形や蟬の殻
脈動の小さきに触るる庭花火

横浜 梅津まり子

断捨離や過去抹消の薔薇の夜
気負はずに生きて孫との氷水
掛香や我が身鎮むる昼下り
夏草を掻き分け供花を摘みにけり
秋近き水面に滑る日ざしかな

横須賀 梅野 宏子

座り込む老犬に差す日傘かな
考と妣へそれぞれ点し盆提灯
捨てられぬ考の飯盒終戦日
心太魔法の突き棒取り合ふ子
前髪を揃へて終り夏休み

横浜 平野 秀子

父となるかつての迷子品川祭
コロナ禍や力士少なき名古屋場所
かなかなや森の万物眠らせて
ひぐらしや尾を振り帰る牛の列
仏壇を占むる九輪の白桔梗

横浜 鈴木 英雄

朝涼しラジオ体操第二まで
雨上り木立を揺らす蟬時雨
餌ねだる猫まとひつく暑さかな
浄土への光の橋か朝の虹
歓声の響く球場風爽か

小川玉泉先生追悼句集

行く春の天の泉地へ立たれけり
なほさらの師のこゑ胸に秋の声
清らなる泉は今も滾々と
聖五月師のほほゑみの天へ召し
一灯の欠けて虚ろや雁渡し
ひぐらしや先師の訃報きく哀れ
すれ違ふごとの目差風涼し
師の金句標に行かむ星月夜
蓮の花見てをらると思ひしが
新緑の中や師の影見失ふ
星月夜偲ぶ恩師の影深し

森清 堯
岡野 里子
黒滝志摩子
森清 信子
菅野日出子
今村 千年
高木 邦雄
小田嶋野笛
岡田 史女
大川 暉美

蓴舟沼は静かに雨を受く
師の笑みの浮ぶ夜空や後の月
海坂に沈む日輪秋夕焼
師の句書く夫人の筆や鉦叩
師の色紙を偲びて卓や秋灯下
末黒野の教へはいまも小鳥来る
夫婦して同じ雅号や二つ星
秋深く俳句の御指導謝意深く
添削の手腕絶妙紫苑かな
身に入みて師の温顔と句短冊
蒼穹へ発ち給ふ師や秋の水
師の教へ永久に輝く星月夜
色なき風と海渡り富士に消ゆ
身に入むや今此処我と師の言葉
菊枯る師の色紙見つ独り酒

加藤 静江
太田 良一
和田 慈子
岩上 行雄
荒井 貞子
橋場 美篤
上月 智子
占部美弥子
大内 由紀
戸田 澄子
沼崎 千枝
池谷 鹿次
小林 清子
山崎 稔子
木下 晃